

そのてにのるな！クマ

新しい日本の童話シリーズ 16



山元護

© 1973

MORIHISA YAMAMOTO



NDC 913

そのてにのるな！ クマ

新しい日本の童話シリーズ・16

著 者——山元護久

発行者——古岡秀人

編集者——石井和夫

本文印刷——信毎書籍印刷株式会社

オフセット印刷——株式会社光村原色版印刷所

製本——株式会社難波製本所

発行所——株式会社学習研究社

東京都大田区上池台 4-40-5

振替東京 142930

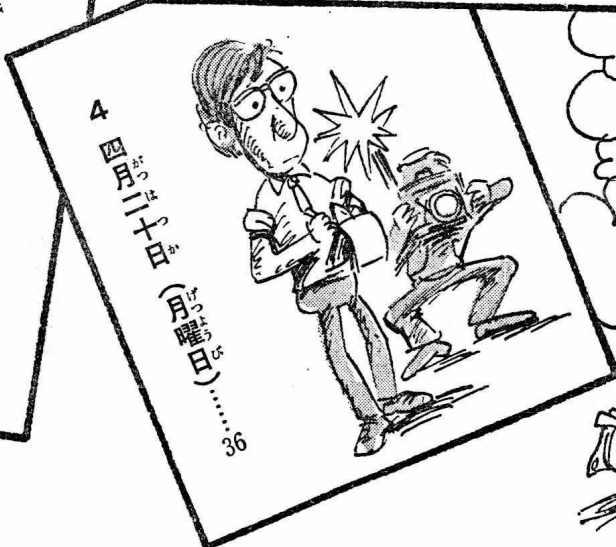
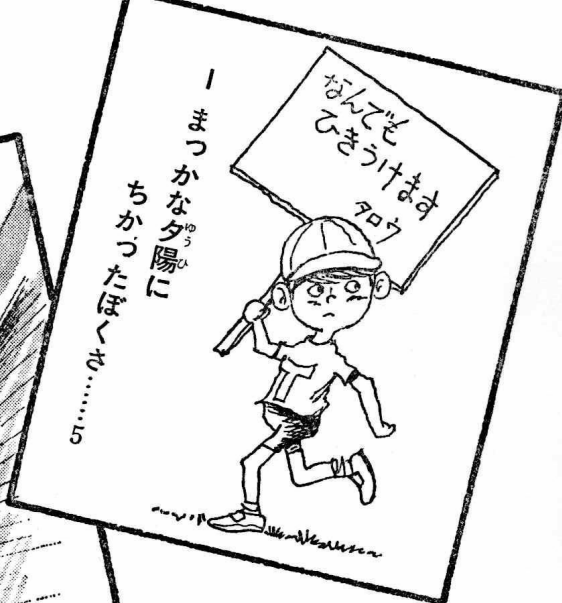
落丁・乱丁本はおとりかえします。この本についてのお問い合わせは
東京都大田区上池台 4-40-5 (〒145) 学研ユーザー・サービス本部
事務局「児童図書係」Tel(03)727-1600 (03)720-1111 内線352, 353

新しい日本の童話シリーズ 16

そのてにのるな！クマ

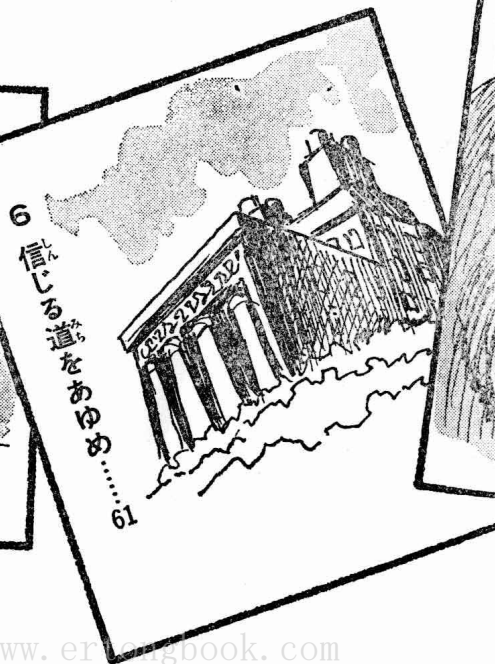
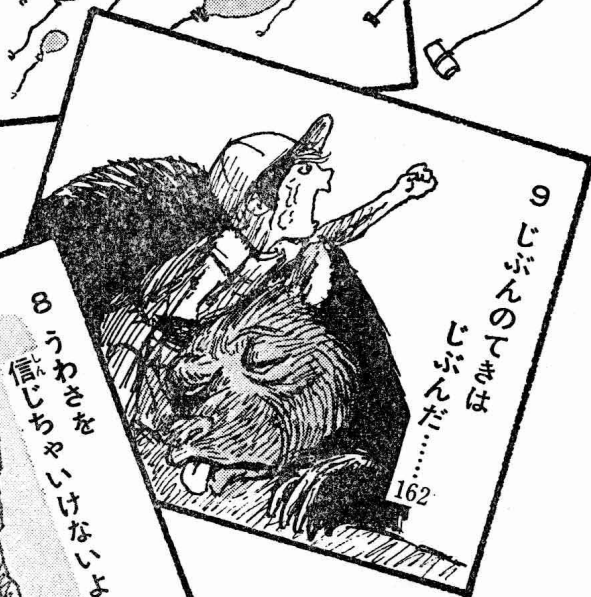
山元護久さく・枝常弘え





そのてにのるな！クマ *もくじ

10
ひとりひとり
じぶんのおしりの
大きさにあつたいすを
みつけたというものです……
218



装^す丁^{てい}
デ
ザ
イ
ン
Ⅱ
池^い田^け
龍^だ
雄^{たつお}

1 まっかな夕陽にちかったほくさ

たろうは九才。

算数の授業ちゆうには、きまって十回あくびをする。

国語の時間には、どういうわけか、いつも十一回ねむくなる。

社会科の時間ともなると、先生の声を、こもりうたとかんちがいするくせもある。

けれど、学級委員の選挙では、投票総数五十三票のうち、五票か六票には、たいてい、

たろうの名まえがかきこまれる。

つまり、クラスでのたろうの人氣は、まあまあといったところ。

ようするに、たろうはふつうの男の子。ただ、みんなとちがっているところがあるとし

たら、学校からかえると、ナンデモ屋をひらくことくらいだ。



ナンデモ屋。

どろぼう、かっぱらい、それに宿題^{しゅくだい}がいなら、なんでもひきうける商売^{しょうばい}。ただし、お金^{かね}をはらってくれるあいてが、みつかればのことだ。

近所^{きんじょ}の家^{いえ}で、ちょっと家^{いえ}をるすにしたいとき、そして、るすをどろぼうにねらわれるのはいや。あきすにはいられるのはなおまっぴら。火事^{かじ}のしんばいもごめんだという人^{ひと}は、たろうに声^{こゑ}をかければよい。

「たのむわねっ！」と、つつけんどんないかたでも、もんくはない。

「おねがいね。」と、ていねいないいかたなら、なおけっこう。

「おみやげかってきてあげるわ。」といわれりや、ますますごきげん。

ともかく、料金^{りょうきん}さえはらってくれれば、たろうははりきってやってくる。そして、その家のだれかがかえってくるまで、がっちりるすをまもってくれる。

このるすばん料金^{りょうきん}が、一時間^{じかん}につき五十円^{えん}。

たろうは、こもりもいやとはいわない。おつかいもひきうける。

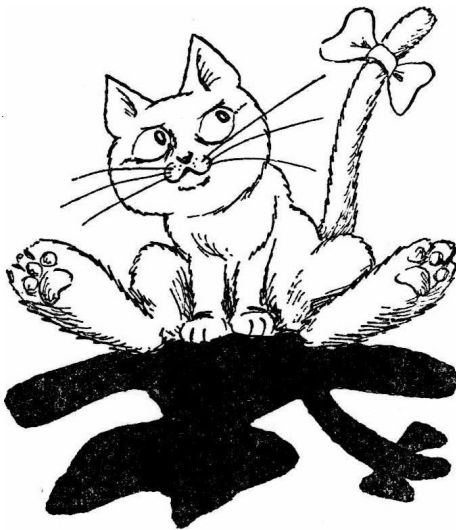
ときには、かいネコのさんぼのあいてもひきうける。かいネコがさんぼのちゅう、の

らイヌにしっぽの毛^けをひんむしられたり、ひげをひっこぬかれないうちに、まもってやるのがしごとだ。

だけど、かいネコはなまいきで、やけにすましているやつがおおい。かいぬしのまえでは、ニャアゴロ、ねこなで声^{こゑ}をだしているけれど、そんなやつにかぎって、さんぽのとちゅう、道^{みち}ばたに十円玉^{えんだま}でもおちていたら、「ふう！」と、はなをならして、ペタンと十円玉^{えんだま}の上^{うへ}におしりをのつける。そして、たちまち、ねこばばをきめこむ。まったく、ねこつかぶりなやつらだ。

たろうは、そんなやつらが、ハウレンソウのつぎに、大^{だい}きらいだ。だから、かいネコのさんぽの料^{りょう}金^{きん}は、十分間^{ふんかん}、なんと百円^{ひゃくえん}！ たろうのしごとのなかでは最高^{さいこう}のねだんにしてある。

このほかに、どらネコが、台所^{だいどころ}からコロッケをちよろまかしてにげたとか、サンマをぬすんですがたをくりましたなんてときにも、たろうにたの

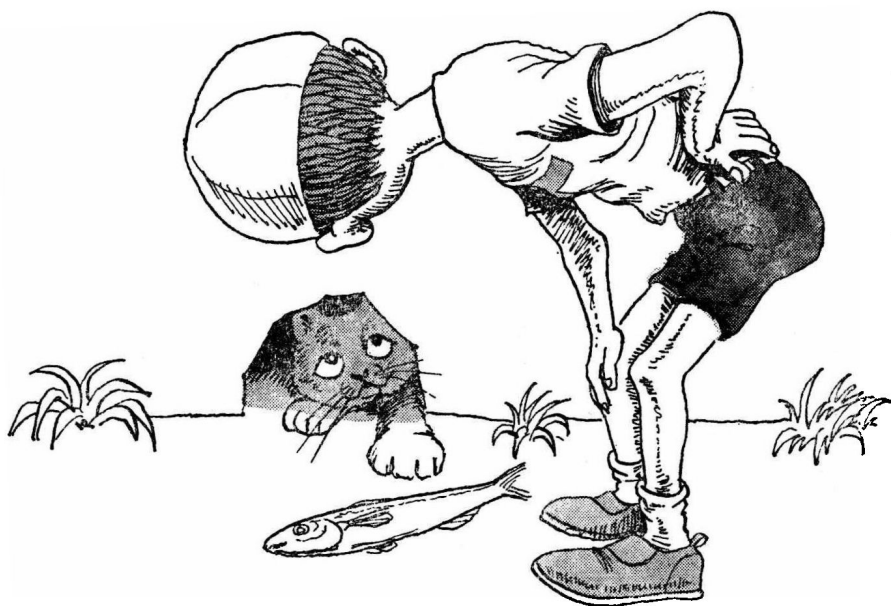


めばよい。たろうは、たちまち、コロツケやサンマをとりもどしてきてくれる。料金は、りようきんどらネコついせき一回かいにつき二十円えん。

どらネコに、コロツケをぬすまれるなんて、おかあさんのはじだ。夕ゆうがたになると、このしごとが、いいにはんじょうする。

一回かいでも、たろうにコロツケをとりもどしてもらったことがある近所きんじよのおかあさんたちは、たろうが、なぜ、すばしっこいにげ足あしのどらネコどもから、サンマやコロツケを、わけもなくとりかえせるのか、ふしぎがる。

なかには、たろうが、わざと、どらネコに、サンマやコロツケをぬすませているのじゃないか——なんて、ばつぐんにうたぐりぶかい



おばさんもいる。じょうだんじゃない。人間にんげんの子どもこの手下てしたになって、子どもにお金かねをも
うけさせてくれるほど、ちかごろのどらネコはあまくはない。たろうが、どらネコから、
サンマやコロッケをとりもどせるには、それなりのくろうをしているのだ。つまり、たろ
うが、町まちじゅうのどらネコと、友ともだちづきあいしているからだ。日ひごろ、おなかをすかし
てしょぼくれているどらネコにであえば、十円えんで、にぼしを十ぴきほどかってやる。そし
て、公園こうえんのベンチにならんでこしかけ、いっしょに、にぼしをかじりあう。だから、町まちの
たいていのどらネコは、たろうのたのみをきいて、ぬすんだコロッケやサンマをかえして
くれる。たろうとどらネコとは、こんな仲なかなのだ。

では、なぜ、たろうはこれほどまでして、お金かねをほしがるのだろうか？

わけもなく、お金かねをためたがるのは、けちんぼだ。しわんぼだ。ごうつくばりだ。よく
ばりだ。しゅせんどだ。

でも、たろうは、けちんぼでも、しわんぼでもない。まして、ごうつくばりでも、よく
ばりでも、しゅせんどでもない、ふつうの男おとこの子こだ。お金かねをためるわけがある。

そのわけは？

おとなのおしりで、はなをおしつぶされたくない！　これが理由だ。

つまり、たろうの町では、ことしの春、町からハイウェイをバスで四十分ほどいった、みずうみのおくに、めずらしい公園をひらくことになっていた。

その公園には、ちかくの森にすんでいる動物たち——クマやシカ、ウサギやサルたちがあつめられ、動物たちと町の人たちとは、あそんだり、いままでよりも自由に話をしたりできるはずだった。タヌキと将棋をさしたいと、はりきっているおじいさんもいた。学校の音楽の先生は、森のリスと、バレエ曲『クルミわり人形』について、意見をこうかんしたいといっていた。めずらしい公園！　世界でもはじめての公園！

町じゅうの人たちは、公園のひらかれる日をまっていた。だから、公園がひらかれる日には、町じゅうの人たちが、どつと、公園へピクニックにくりだすだろう。そうなれば、とうぜん、公園いきのバスは、乗客でぎゅうぎゅうづめになる。

ぎゅうづめ。これが、たろうにはいやなのだ。

そりや、ピクニックに牛肉のかんづめや、びんづめのイチゴジャムはつきもの。こんなづめならもんくはない。だいすきだ。けれど、づめはづめでも、ぎゅうづめバスはいだだ

けない。ぎゅうづめのバスにゆられてピクニックにいくのなんか、まっぴらごめんだ。

おとなの、ぶよんぶよんした、どでかいおしりにはなをおしつぶされるのなんか、とて
もがまんでできない。かんがえただけで、むねがむかむかする。おまけに、はなつきで、
スーとか、ブーとか、一発^{ぱつ}、ぶちかまされるきけんだってある。

「そんなら、バスにのるのはあきらめろよ。たろうくん。」

友^{とも}だちに話^{はな}したら、友^{とも}だちはあたりまえのような顔^{かお}で、たろうにいった。

「きみの家^{いえ}には、マイ・カーもないんだろ？」

もうひとりが、ねんをおした。

「それに、自^じ転^{てん}車^{しゃ}もないんじゃない、あるいていくしかないぜ。たろうくん。」

「どうする？」

と、しんせつに、ハイウェイの地図^{ちず}をかしてくれようとした友^{とも}だちもいたくらいだ。

じょうだんじゃないよ。バカ、カバ、カボチャ！ おとなのために片道^{かたみち}六時間^{じかん}もあせを
かきかきあるいていくなんて、気^きのきいた子^こどものやることじゃない。まぬけ！ ぬけさ
く！ とんま！ たろうは、心^{こころ}のなかで、友^{とも}だちをさんざんこきおろしてやった。そうと

は知らない友だちは、

「じゃ、どうするんだ？」

と、すましてきいた。まるで、じぶんが、おとなの仲間だと信じているみたいだ。

「ハイヤーでいくのさ。」

たろうは、きっぱりこたえてやった。

「ハイヤーだって?!」

友だちは、たろうがケープ・ケネディ基地から、宇宙船にのりこむとでもいったようにおどろいた。

「そうとも！ ハイヤーをとばして、ピクニックにいくのさ！」

これが、たろうの計画だ。かなりな大計画。なにしろ、たろうがしらべたところでは、みずうみのおくの公園まで、二十六キロ。ハイヤーでいくには、片道、四千六百八十円はかかる。かえりのハイヤー料金二千三百四十円をくわえると、七千二十円。それに、公園で四時間あそぶとして、そのあいだの待ち時間の料金が六千円。合計一万三千二十円。気がとおくなりそうな大金だ。

じっさい、たろうは町のハイヤー会社で料金をしらべて計算し、一万三千二十円とこたえがでたとき、おもわず、おでこの上のあたりが、スーッとつめたくなった。頭がくらくらした。目のまえがくらくなった。いや、往復のタクシー代が、あと、もう十円たかかったら、たろうはまちがいなく、完全に目をまわしていたにちがいない。

一万三千二十円。大金だ!! だけど、たろうは大計画をやめようとはおもわない。じぶんののぞみを、お金のためにあきらめるなんて、男の子のやることじゃない。それに、九才にもなった男の子が、一万三千二十円のお金をためられないとは、なさけない。そうとも! 男一びき、やってやろう! 一万三千二十円をためるんだ。たろうはちかった。ちかったしるしに、こづかいをはたいて、一個百円のブタの貯金箱をかってきた。百円もだして、ブタの貯金箱をかったんだから、ためなきや、ブタの貯金箱がむだ死にする。つまり、とん死だ。

「ぼくはおまえを、とん死させはしない!」

たろうは、あたらしい、せともののブタをしつかりむねにかかえ、夕やけ空をにらんだ。こういうわけで、たろうはナンデモ屋を開業した。お金もうけにせいをだした。



そして、その日も、るすばんをひきうけたのだ。

おなじクラスの女の子、コナカ・ミミの家のるすばんだ。

ここで、とかく、おっちょこちょいの男の子に注意しておくけど、女の子なんて、るすばんもできない、よわい人種だとあまく見ちゃ、ひどい目にあう。女の子というものは、その気にさえなれば、男の子を、台所のゴキブリをたたきつぶすよりかんたんに、あるいは、どろのなかのオケラをひねりつぶすより気らくに、やつつけることができる実力者なのだ。コナカ・ミミも、そういう人種のひとり。女の子。とうぜんるすばんくらいできる。だけど、ミミは、たろうに、お金をもうけさせてやりたかった。だから、わざとだだをこねて、るすばんをいやがり、おかあさんといっしょに、デパートへでかけたのだ。つまり、コナカ・ミミは、マーガレット人形のつぎに、かいネコのミケがすきだったし、そのつぎに、たろうがすきなのだ！ というわけで、たろうは、その日、ミミの家のるすばんをひきうけた。そして、事件にまきこまれたのだ。

おとなのあいだでいいふるされた、こんなことがある。